

第109回 『わかるように伝えてますか』

香川大学 坂井 聰

今回はやる気の話です。

「やらなければならぬとわかっているけど始められない」、「やろうと思うけど。始められない」ということは誰にでもあります。私たち大人にもあるし、子どもにもあります。診断を受けている受けていないにかかわらず同じです。

学校でよく相談を受けるのは、やる気が感じられない子どもの相談です。自分から動くことができない子どものことです。いわゆる指示待ちになっている子どものことです。「力はあると思うのですが、自分からしようとしないのです。」とよく聞きます。実際に子どもに会ってみると、力は確かにあると思われるけれど、先生から何か言われるのを待っている感じです。先生が「どうぞ」と言ったら、その場で求められている、必要だと思われる行動を始めます。ちゃんとできているのに何かしら不安な様子も見られます。先生は「できるじゃありませんか。なら自分でできるでしょ。これでいいんです。今度からは自分からしてください。」と言っています。しかし、これと同じことが、毎日のように繰り返されているということです。どうしてこのようになってしまったのでしょうか。

実は無気力は学習されるということです。自分でやってもやっても注意されたり修正されたりすることが続くと、誰もがやる気を失ってしまうということです。その結果どうなるかというと、周囲の人から指示されたことをしておけばよいと学習してしまうのです。自分から動くといろいろ指示されて、心理的なストレスが大きくなるので、心理的なストレスを軽減することができるよう、その環境に人間は適応しようとするのです。適応した結果、指示待ちという状態になっているということです。心理的負担も少ないし、その際に感じるエネルギーも少なくて済むので、指示待ちなっているということはとても合理的な状態にあるということです。

このような状態になってしまふと、その状態から自発的に行動できる状態に変化させるには時間がかかります。時間がかかることを知ったうえで、対応することが重要です。まず簡単にできることから、周囲は待って、自発的に動けたことを評価するということです。その際、やり直しなどさせてしまったらだめです。失敗しても、自発的に動けたことの方を評価するようにしなければなりません。周囲の大人は、良かれと思って指示したり注意したりしたはずなのですが、その結果が、思いもよらない形で学習されるということを知っておく必要があります。

無気力な赤ちゃんはいません。意欲的なものです。だからこそ、そのエネルギーを維持しながら学んでもらえるように、肯定的に指示すること、学習できるように支援することが重要なのです。今からでも決して遅くはありません。少し意識して関わってみたらどうでしょうか？

～坂井聰先生の紹介～

((プロフィール))

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授。1997年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。